

水海道方言の複合型希求構文*

佐々木 冠

1. はじめに

水海道方言¹は標準語の「に」が用いられている領域で複数の斜格格助詞が使い分けられている。間接目的語は与格（NP-nge または NP-sa）で表され、いわゆる斜格主語（経験者）は経験者格（NP-ngani）で、そして位置を表す斜格名詞句や動作主を表す名詞句は位格（NP-ni）で表される。この斜格格助詞の使い分けは、何らかの統語論上の差異や意味的な差異を反映しているものと考えられる。標準語の「に」に関しては、用法の分類がいくつか提案されている。水海道方言における斜格格助詞の分岐は、標準語で提案されている「に」の用法の分類と一致する場合もあれば一致しない場合もある。このような格体

*水海道方言の希求構文に関しては、佐々木（1999b）を発表して以降、井上優、松本曜、宮島達夫、宮良信群、竹沢幸一の各先生方から示唆に富むご教示を承ってきた。この場を借りて感謝の意を表したい。なお、全てのミスや誤解が著者の責任であることは言うまでもない。

¹ここで水海道方言と呼ぶ言語体系は、水海道市を中心とする茨城県南西部で話されているものである。この方言の文法的特徴としては、(i) 音韻論的には、母音間閉鎖音の有声化など茨城県の東部や北部と共通する点があること、(ii) 形態統語論的には、連体修飾格、対格、与格で有生格と無生格が形式的に異なることや標準語の「に」の使用領域で複数の斜格格助詞が使い分けられている点が上げられる。この方言の格体系の全体像については、佐々木（1999a）を参照。データの表記法に関しては、次の点を留意されたい。Nは撥音を、ngは軟口蓋鼻子音を、Qは促音（重子音の前半）を表す。子音にjが後続するものは硬口蓋化を表す。格の略称は次の通り：主＝主格、対＝対格、与＝与格、位＝位格、経＝経験者格、奪＝奪格、所＝所有格。与格の有生／無生の区別に関しては、必要に応じて下付文字で表す。本稿で用いるデータの多くは、1998年春から1999年夏にかけて行った調査に基づくものである。長い時間根気強く調査に協力して下さった大滝仁作氏に感謝の意を表したい。

系をもつ言語体系の記述は、斜格名詞句の統語論上の位置付けや意味論上の分類を考える上で興味深いデータをもたらす可能性がある。

本稿は、水海道方言の複合型希求構文の記述である。ここで希求構文と呼ぶものは、ある主体が、ある事態を希求する意味を持つ構文である。標準日本語（以下、標準語）でいえば、「～てほしい」構文がそれにあたる。

水海道方言の希求構文は、標準語の「～てほしい」構文がそうであるように、希求される事態を補文であらわす形の補文構造をとる。この方言の希求構文には、2種類ある。morae-de(もらいたい)を主節の述語とする構文と hosi : (ほしい) を主節の述語とする構文である。前者を「複合型希求構文」、後者を「単純型希求構文」と呼ぶことにしよう。

この方言が話されている地域を含む東日本では、古くは複合型希求構文しか存在しなかったという説がある。真田(1980)によって提唱されたこの説は、2つの希求構文の地理的分布と「浪速聞書」という江戸時代の文献で「～てほしい」が関西の表現として、「～てもらいたい」の訳を与えられていることを根拠としている²。現在、筆者の調査に協力してくれたインフォーマントから得たデータを見る限り、2つの希求構文は、この方言では並存状況にある。2つの希求構文は、統語論的にも意味的にもほぼ同様の性質を示す。ここでは、この地方の方言により古い時代からあったとされる複合型希求構文について、その統語論的特徴と意味論的特徴を記述することにする³。

仮に、事態を希求する主体を「希求者」、希求される事態を表す補文の主語に対応する要素を「被希求者」と呼ぶことにしよう。この方言の希求構文では、希求者は主節の主語として現れる。一方、被希求者には2通りの現れ方がある。この方言の複合型希求構文には、標準語の場合と同様、被希求者の格表示で対立する2つの格フレームがある。一方の格フレームでは、(1a)に示すように、被希求者は与格(NP-*nge*)で現れる。これを「与格パターン」と呼ぶことにしよう。もう一方の格フレームでは、(1b)に示すように、被希求者は単独用法の主語と同様の格形式で現れる。こちらは「非与格パターン」と呼ぶことにしよう。

² 真田(1980)の説については、宮島達夫(私信)の指摘によって知った。

³ 水海道方言の単純型希求構文に関しては、佐々木(1999b)およびSasaki(近刊予定)を参照。前者は、単純型希求構文の統語論上の特徴を記述したものであり、後者は与格被希求者に関する意味的制約を記述したものである。

- (1) a. ora **ome-nge** sogo-ni e-de morae-de. …与格パターン
 私－主 あなた－与 そこ－位 いてもらいたい
 私はあなたにそこにいてもらいたい
- b. ora **ome** sogo-ni e-de morae-de. …非与格パターン
 私－主 あなた－主 そこ－位 いてもらいたい
 私はあなたがそこにいてもらいたい。

なお、ここで (1b) について単に「主格で現れる」とか「主格パターン」としなかったのは、第3節で詳しく見るように被希求者が経験者格で現れる場合があるからである。この方言では、斜格主語 (NP-ngani) が斜格補部 (NP-nge や NP-ni など) と形式上異なる。この形式上の区別があるため、この方言では、希求構文の格フレームに関して、標準語には見られない区別が見られる。第3節に示す *wagar-u* (わかる) を埋め込んだ例がそれである。*wagar-u* は、主語が経験者格 (NP-ngani) でマークされる述語である。この述語を含む複合型希求構文は、与格パターンでは被希求者が与格で、非与格パターンでは経験者格で現れる。被希求者が経験者格で現れることは、複合型希求構文における格付与を考える上で重要な現象である。

複合型希求構文は、与格名詞句が単文とは異なる振る舞いをする構文でもある。この方言の与格名詞句は、単文では、再帰代名詞の先行詞として解釈されたり遊離数量詞と同一指標を持つ要素と解釈されることはない。一方、与格被希求者は与格名詞句でありながら、再帰代名詞の先行詞として解釈されたり、遊離数量詞と同一指標を持つことが可能である。与格被希求者は与格名詞句として統語論的に特異な振る舞いをする要素といえる。本稿では、この特異性が複合型希求構文の統語構造に起因するものであることを明らかにしたい。

本稿の構成は以下の通りである。まずはじめに、第2節と第3節で、述部の構成や格フレームといった、複合型希求構文の形式面の特徴を記述し、次に、この構文の統語論上の特性を記述する。第4節では否定対極表現の分布の記述から、与格被希求者と非与格被希求者が、否定のスコープに関して異なる振る舞いをすることを明らかにする。また、第5節では、希求構文における再帰代名詞や遊離数量詞の解釈を記述することを通して、与格被希求者の統語論上の特異性を明らかにしたい。本稿では、これらの形式面の特徴や統語論上の振る舞いから、この方言の複合型希求構文に関して、

1. 与格被希求者は主節の述語によって格付与され、補文の主語をコントロールする要素である。
2. 非与格被希求者は補文の主語であり、補文の述語によって格付与される。という分析を提案する。これとは逆の格付与を想定する分析も、標準語では提案されている。与格被希求者は補文の内部で格付与され、非与格被希求者は主節の述語から格付与されるという分析である。第6節では、本稿とは逆の分析が、水海道方言に適用困難であることを明らかにしたい。

被希求者の格表示が主節に依存するのか補文に依存するのかという問題は、斜格名詞句の統語論上の位置付けを考える上で重要な問題である。また、本稿ではこの方言の分析で得られた知見をもとに、標準語の希求構文の分析についても提言を行いたい。

2 述部の構成

複合型希求構文の統語論上の性質を記述する前に、この構文の述部の構成について記述することにする。この節では、複合型希求構文の述部を構成する3つの要素（動詞のテ形, *morae*, *-de*）の構成と否定接辞の分布を扱う。この2点は、この構文の統語論上の性質を考える上でも重要である。

2.1 「動詞のテ形+*morae-de*:」

複合型希求構文の述部は、「動詞のテ形+*morae-de*:」という構成になっている。この構文の述部は、「動詞のテ形」「*morae* (*mora*:の連用形)」「願望を表す接辞-*de*:」の3つの要素からなる。「受益構文の述部 (*V-te morae*) + *-de*:」という構成も考えられる。動詞の連用形に-*de*:が付属して願望文の述部（例：*kagi-de*: ‘書きたい’）が構成されることも考えると、「受益構文の述部+*-de*:」という構成も一見ありえそうである。しかし、そうではなく、「動詞のテ形+*morae-de*:」と分析するのは、次の3つの理由からである。理由は、それぞれ、受益構文との対応関係に関するもの、単純型希求構文との意味的類似に関するもの、そして格フレームに関するものである。

第1の理由は、対応する受益構文が存在しない場合があることである。複合型希求構文の述部を「受益構文の述部+*-de*:」とする分析は、受益構文の述部の存在を前提としている。以下に挙げる例のように、複合型希求構文の中には対応する受益構文が存在する場合もある。

(2) 複合型希求構文と受益構文がともに存在する例：

複合型希求構文	受益構文	述語
kj-te morae-de:	kj-te mora:	来る
wagaQ-te morae-de:	moN-de morae-de:	わかる
moN-de mora-de:	moN-de mora:	揉む

しかし、常に対応する受益構文が存在するとは限らない。次の例が示すように、対応する受益構文が存在しない複合型希求構文も存在する。

(3) 対応する受益構文がない例：

複合型希求構文	受益構文	述語
(aza) ki:-de morae-de:	*(aza)ki:-de mora:	消える (痣)
(ame) huQ-te morae-de:	*(ame) huQ-te mora:	降る (雨)
(oi) wae-de morae-de:	*(oi) wae-de mora:	沸く (お湯)

「受益構文の述部+de:」という構成を想定すると、(3)に挙げた例では、実在しない受益構文の述部に-de:が付属するという抽象的な分析を行わなければならない。一方、「動詞のテ形+morae-de:」という構成を想定した場合、常に、複合型希求構文の述部は、実在する要素の組み合わせと見なすことができる。左側の要素である動詞のテ形も右側の要素である morae-de:も実際に存在する要素だからである。

第2の理由は、単純型希求構文との意味上の共通性に関するものである。この方言に、単純型と複合型の2つの希求構文が存在すること、そして、両者がほぼ同義であることは、既に述べた。単純型希求構文の述部(例: kae-de hosi: ‘書いてほしい’)は、「動詞のテ形+hosi: (ほしい)」という構成である。複合型希求構文の述部を「動詞のテ形+morae-de: (もらいたい)」と分析してみよう。2つの希求構文の述部を比較すると、右側の部分、すなわち hosi: (ほしい) と morae-de: (もらいたい) がほぼ同義であることがわかる。「動詞のテ形+morae-de:」という構成を想定した場合、2つの希求構文の同義性は、述部を構成する要素 (hosi: と morae-de:) の同義性に由来するものと考えることができる。

第3の理由は、格フレームに関するものである。第3.2節で見るように、被希求者が斜格で現れる場合、話者によって与格を用いる場合と位格を用いる場

合がある。この方言では、受益構文は次のような格フレームを取る。

(4) <主節の主語 = 主格, 補文の主語に対応する要素 = 位格...>

ora **sengare-ni(*-nge)** i:biNkjogu-sa eQ-te moraQ-ta.

私－主 息子－位 (*与) 郵便局－与 行ってもらった

私は息子に郵便局に行ってもらった。

受益構文では、補文の主語に対応する要素は位格で表され、与格では表されない。「受益構文の述部+*-de:*」という構成を想定した場合、被希求者が位格の複合型希求構文は、受益構文の格フレームを引き継いだものと見なすことができる。しかし、被希求者が与格で表される場合は、その与格が何に由来するのか説明することができない。受益構文では与格は付与されないし、*-de:*も名詞句に与格を付与する要素ではない。「受益構文の述部+*-de:*」という構成を想定した場合、被希求者が位格で現れることは予想できるが、与格で現れることは予想できない。

これに対し、「動詞のテ形+*morae-de:*」という構成を想定した場合、被希求者の位格及び与格は、複合述語の右側の要素である *morae-de:* に由来するものと見なすことができる。詳細は、後述するが、*morae-de:* は、以下に示すように与格を含む格フレームと位格を含む格フレームをもっている。下の例では、与格は着点を表し、位格は起点を表す。

(5) a. ora **sengare-nge** jome-godo *morae-de:*.

私－主 息子－与 嫁－対 もらいたい

私は息子に嫁をもらいたい。

b. ora **ozitsjan-ni** kotske: *morae-de:*.

私－主 お爺さん－位 小遣い－対 もらいたい

私はお爺さんに小遣いをもらいたい。

被希求者を与格で表す話者の場合、複合型希求構文の格フレームは、与格を含む *morae-de:* の格フレームに由来しているものと見ることができる。また、被希求者を位格で表す話者の場合、複合型希求構文の格フレームは、位格を含む *morae-de:* の格フレームに由来しているものと見ることができる。このように、「動詞のテ形+*morae-de:*」という構成を想定した方が、話者の間の格

フレームのゆれも把握できる。

2.2 否定接辞の分布

次に否定接辞の分布について見ることにする。後述するように、否定接辞の分布は、被希求者の統語論上の位置づけを考える上でも重要である。

複合述語の中には、外側の述語にしか否定接辞が付かないものと、外側の述語にも内側の述語にも否定接辞が付くものがある。複合型希求構文の述部は、後者に分類される。

(6) 否定接辞の位置：

述語 1 - 否定 述語 2	述語 1 述語 2 - 否定	構文の種類
不可能	kuw-ase- ne	使役文
kuwa- ne -de hosi :	kut-te hosjka- ne	単純型希求構文
kuwa- ne -de morae-de :	kut-te morae-daga- ne	複合型希求構文
kuwa- ne -de mora :	kut-te mora : - ne	受益構文

述部だけを見た限りでは、否定接辞が内側についても外側についても、ほぼ同義に見えるかもしれない。しかし、否定接辞が外側の述語に付属するか内側の述語に付属するかによって、否定のスコープは異なる。そして、否定対極表現の分布も、それに伴い、異なってくる。このことは、あとで詳しく見るように、複合型希求構文の統語構造を考える上で重要である。

なお、この方言で未然形に接続する否定接辞には、上述の-ne (ない) の他に-me (ないだろう) がある。外側の述語 (mora-de:) には両方とも付属することができるが⁴、内側の述語 (動詞-te) には-ne しか付属することができない。

3 格フレーム

この節では、複合型希求構文の2つの格フレームについて記述する。

⁴ -me が、複合型希求構文の述部についた形は次のとおり。jat-te morae-dagaN-me: (やってもらいたくないだろう)。

3.1 Morae-de:の単独用法

複合型希求構文の述部は、「動詞のテ形+morae-de」からなる。morae-deの単独用法における格フレームを記述することは、複合型希求構文の格フレームを考える上でも重要である。

以下に示すように、単独用法の morae-de には、2つの格フレームがある。位格を含む格フレームと与格を含む格フレームである。

- (7) ora **are-ni** nektae morae-de.
 私-主 彼-位 ネクタイ-対 もらいたい
 私は彼に（から）ネクタイをもらいたい。

- (8) ora **are-nge** nektae morae-de.
 私-主 彼-与 ネクタイ-対 もらいたい
 私は彼に（対して）ネクタイをもらいたい。

2つの格フレームは、斜格要素と結びつく意味役割が異なる。(7)では、斜格要素である位格名詞句は起点を表す。一方、(8)では、斜格要素である与格名詞句は着点を表す。着点と起点を一つの文の中で表す場合、着点は与格に、起点は奪格になる。

- (9) ora **are-gara sengare-nge** nektae morae-de.
 私-主 彼-奪 息子-与 ネクタイ-対 もらいたい
 私は彼から息子にネクタイをもらいたい。

このような場合、起点を位格で表すことはできない。

単独用法の morae-de は、hosi:（単純型希求構文の述部の一部）の単独用法とはほぼ同義である。2つの述語には格フレームに関しても共通する点がある。hosi:も morae-de と同様に着点と与格で表す格フレームを持っている。

- (10) ora **sengare-nge** jome-godo hosi:.
 私-主 息子-与 嫁-対 ほしい
 私は息子に嫁がほしい。

一方、2つの述語には格フレームに関して異なる点もある。morae-de は、起点を位格で表すことが可能であったが、hosi: は起点を位格で表すことができない。起点は、hosi: の単独用法では奪格で表される。

- (11) ora **are-gara** (*-ni) nektae hosi:.
 私-主 彼-奪 (*-位) ネクタイ-対 ほしい
 私は彼からネクタイがほしい。

複合型希求構文の述部の一部である morae-de が、単独用法でも与格をとる格フレームをもっていることは、複合型希求構文の格フレームを考える上でも重要である。

3.3 2つの格フレーム

3.2.1 与格パターン

既に述べたように、複合型希求構文は2つの格フレームをとる。与格パターンと非与格パターンである。2つの格パターンは被希求者の格形式が異なる。与格パターンでは、被希求者は与格になる。なお、話者によっては、このパターンで被希求者を位格で表す者もいる。

- (12) a. ora **are-nge** hinge soQ-te morae-de. …被希求者 = 与格
 私-主 彼-与 髭-対 剃ってもらいたい
 私は彼に髭を剃ってもらいたい。
 b. ora **are-ni** hinge soQ-te morae-de. …被希求者 = 位格
 私-主 彼-位 髭-対 剃ってもらいたい
 私は彼に髭を剃ってもらいたい。

既に見たように、morae-de は単独用法でも与格を含む格フレームと位格を含む格フレームを持っている。上記の格パターンにおける被希求者の格表示は、主節の述部である morae-de に依存するものと見ることができるだろう。以下、議論を複雑にしないため、被希求者を与格で表す話者のデータをもとに記述を行う。個人間の格フレームのバリエーションに関しては、別な機会に取り上げることにはしたい。「与格パターン」という名称は、本稿が与格を用いる話者からのデータを使ったことによる便宜的なものである。

なお、与格被希求者と他の複合述語文の斜格名詞句との形式上の異同も、与格被希求者の格表示が主節の述語に依存していることを示唆する。以下の例に示すように、複合述語文において補文の主語に対応する斜格名詞句は、構文ごとに異なる。

- (13) ora **mago-nge** siNbuN jom-ase-da. ……………使役文
私-主 孫-与 新聞-対 読ませた
私は孫に新聞を読ませた。

- (14) ora **mango-ni** siNbuN joN-de **moraQ**-ta. ……………受益構文
私-主 孫-位 新聞-対 読んでもらった
私は孫に新聞を読んでもらった。

- (15) ora **kaenego-ni** saNpjki sin-are-da. ……………間接受動文
私-主 飼い猫-位 3匹 死なれた
私は飼い猫に3匹死なれた。

補文の主語に対応する要素は、使役文では与格で、受益構文や間接受動文では位格で現れる。そして、本稿の記述の対象である複合型希求構文では与格で現れる。これらの複合述語文は、主節の述語が異なる。使役文では-(r)aseであり、受益構文では mora: であり間接受動文では-(r)are である。このことは、主節の述語が、複合型希求構文を含む複合述語文における斜格名詞句の格形式を決定していることを示唆する。

3.2.2 非与格パターン

次に、非与格パターンについて見ることにする。この格パターンでは、被希求者は、主格または経験者格で表される。

- (16) 補文が自動詞の場合：非与格パターンでの被希求者は主格
ora **ome** sogo-ni e-de morae-de.
私-主 お前-主 そこ-位 いてもらいたい
私はお前がそこにいてもらいたい。

- (17) 補文が他動詞の場合：非与格パターンでの被希求者は主格
 ? ora **ziNsa** haNniN-godo taeho sj-te morae-de.
 私－主 巡査－主 犯人－対 逮捕してもらいたい
 私は巡査が犯人を逮捕してもらいたい。

- (18) 補文が心理動詞 *wagar-u* の場合：非与格パターンでの被希求者は経験者格
 ora **are-ngani** sore-ngure: wagaQ-te morae-de.
 私－主 彼－経 それぐらい わかってもらいたい
 私は彼にそれぐらいわかってもらいたい。

非与格パターンにおける被希求者の格表示は、補文の述語の性質によって決定される。補文の述語が他動詞や自動詞なら、被希求者は主格で現れ、*wagar-u*（わかる）の場合、経験者格で現れる。なお、(17) に示したように他動詞文が補文の場合、非与格パターンは、不可能ではないものの好まれない。他動詞文が補文の場合には、与格パターンが好まれる。

他動詞や自動詞の単独用法では主語は主格で表される。*wagar-u* の単独用法では主語は経験者格で表される。

- (19) **ome** sogo-ni e-ru ……………自動詞の単独用法：主語＝主格
 お前－主 そこ－位 いる
 お前がそこにいる。

- (20) **ziNsa** haNniN-godo taeho sj-ta. …他動詞の単独用法：主語＝主格
 巡査－主 犯人－対 逮捕した。
 巡査が犯人を逮捕した。

- (21) **are-nganja** sore-ngure: wagaQ-pe. …*wagar-u* の単独用法：
 彼－経－トピック それぐらい わかるだろう 主語＝経験者格
 彼にはそれぐらいわかるだろう。

非与格パターンにおける被希求者の格表示は、補文の述部が単独用法で用いられる場合の主語の格表示と同じである。このことから、非与格パターンにお

ける被希求者の格表示が、補文の述部に依存していることがわかる。

3.2.3 標準語にはない区別

水海道方言では、標準語で「NP-に」で表される要素が、さまざまな格形式で現れる。3項述語文の着点名詞句は与格(NP-nge, NP-sa)で, *wagar-u* (わかる) や *me:-ru* (見える) の経験者名詞句は経験者格(NP-ngani)で, 位置を表す名詞句や受動文の動作主は位格(NP-ni)で表される。

- (22) a. *ojazi ore-nge ho:tsjo:-no tongigada*
 親父-主 私-与_{有生} 包丁の研ぎ方-対
ose-da.
 教えた……………着点 = 与格
 親父が私に包丁の研ぎ方を教えた。
- b. *are dogo-sa eQ-ta?* ……………着点 = 与格
 彼-主 どこ-与_{無生} 行った
 彼はどこに行った?
- c. *are-nganja ome-godo wagaN-me.* …経験者 = 経験者格
 彼-経-トピック お前-対 わからないだろう
 彼にはお前がわからないだろう。
- d. *ora uzi-ni e-ru.* ……………位置 = 位格
 私-主 家-位 いる
 私は家にいる。
- e. *ora ho:tsjo:-no tongigada ojazi-ni*
 私-主 包丁の研ぎ方-対 親父-位
osaQ-ta.
 教わった……………動作主 = 位格
 私は包丁の研ぎ方を親父に教わった。

この方言では、経験者を表す斜格が与格と形式的に異なる。このため、希求構文において標準語には見られない格形式の区別が見られる。*wagar-u*を含む希求構文における補文の主語の格表示が、与格パターンと非与格パターンで異なることがそれである。

標準語の希求構文(～てほしい)にも与格パターンと非与格パターンの2つ

の格フレームがある。自動詞や他動詞を含む希求構文の場合、標準語でも与格パターンと非与格パターンで被希求者が別々の格形式になる。

(23) 自動詞文を補文とする希求構文（標準語）

a. 僕は 君が そばにいてほしい。

……………非与格パターン（被希求者＝主格）

b. 僕は 君に そばにいてほしい。与格パターン

……………（被希求者＝与格）

(24) 他動詞文を補文とする希求構文（標準語）

a. 非与格パターン（被希求者＝主格）：

（私は）外銀が 借金を無理に取り立てないでほしい。

（朝日新聞朝刊，1999年3月16日，1面より。「()」内は筆者が補った。）

b. 与格パターン（被希求者＝与格）：

私は 外銀に 借金を無理に取り立てないでほしい。

しかし、いわゆる与格主語をとる「わかる」のような述語を含む場合、被希求者が与格で現れても、与格パターンの格フレームに現れたために与格になっているのか、自動詞や他動詞の非与格パターンの場合と同様に、単独用法における主語の格表示が現れているのか見分けることができない。

(25) 「わかる」を含む希求構文（標準語，与格パターン？非与格パターン？）

僕は 彼にも このぐらいわかってほしい。

これに対し、水海道方言では、wagar-uのような斜格主語をとる述語を埋め込んだ場合でも、与格パターンと非与格パターンは区別できる。

(26) a. ora **ome-ngani** sore-ngure: wagaQ-te morae-de.

私－主 お前－経 それぐらい わかってもらいたい

……………非与格パターン

私はお前にそれぐらいわかってもらいたい。

b. ora ome-nge sore-ngure: wagaQ-te morae-de.

私-主 お前-与 それぐらい わかってもらいたい

……………与格パターン

私はお前にそれぐらいわかってもらいたい。

与格パターンでは、被希求者は与格で現れ、非与格パターンでは経験者格で現れる。与格パターンで被希求者が与格になるのは、自動詞や他動詞を埋め込んだ場合と同じである。また、非与格パターンで、被希求者が、単独用法における主語と同じ格形式になる点も、自動詞や他動詞を埋め込んだ場合と同じである。

3.2.4 まとめ

2つの格パターンをまとめると次のようになる。


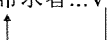
(27)

	被希求者の格表示	
	水海道方言	標準語
与格パターン：	与格 (NP-nge)	与格 (NP-に)
非与格パターン：	主格 (NP- ϕ), 経験者格 (NP-ngani)	主格 (NP-が)

標準語の場合、心理述語を含む希求構文では格パターンの区別が表面上なくなってしまう。これに対し、水海道方言では、心理述語を含む希求構文でも与格パターンと非与格パターンの区別が保たれている。これは、この方言で、標準語の「に」の使用領域で複数の格形式が使い分けられているためである。後述するように、心理述語を含む希求構文における与格パターンと非与格パターンの区別は、否定のスコープの違いといった意味上の性質にも反映している。

ここでは、morae-de が単独用法でも与格をとる格フレームを持っていることから、与格パターンにおける被希求者の格表示は主節の述語 morae-de に依存しているものと分析した。また、与格被希求者の格表示が主節の述語に依存することは、他の複合述語文の補文の主語に対応する斜格名詞句との形式上の異同からも示唆されることを示した。そして、非与格パターンにおける被希求者の格表示については、格形式の区別が補文の述語の性質に左右されることから、補文の述語に依存するものと分析した。言い換えると、与格被希求者は複

合述語の外側の要素に依存し、非与格被希求者は内側の要素に依存しているというわけである。図式化すると次のようになる。

- (28) a. [希求者 被希求者 [...V-te] morae-de] ……………与格パターン:
 ←与格付与
 b. [希求者 [被希求者...V-te] morae-de] ……………非与格パターン:
 ←主格／経験者格付与

被希求者の格付与に関しては、これとは異なる分析も存在する。Harada (1977) や Takezawa (1987) はここでの分析とは逆の分析を提案している。与格被希求者は補文の内部で格付与され、非与格被希求者は主節の述語によって格付与されるというものである。このような分析の妥当性については、第6節で検証してみたい。

3.3 2つの格フレームの相違

与格パターンと非与格パターンは、それが成立する意味的条件が異なる。以下、与格パターンについて現時点で指摘できる意味的制約を2つ挙げる。この2つの制約の何れかに違反する場合、希求構文は与格パターンをとることができない。そのような場合には、非与格パターンが用いられる。

なお、ここで述べる制約はあくまで現時点で指摘できる部分的なものに過ぎないこと、そして筆者は他の制約または条件が関与的であることを否定するつもりが全くないことをあらかじめ断っておく。以下にみる2つの制約以外の要因が、関与している可能性が大いにある。それについてはさらに研究を行う中で明らかにしていきたい。

3.3.1 有生性制約

次の例文が示すように、非与格パターンの場合、被希求者は有生であっても無生であっても構わない。

- (29) 非与格パターン: 有生性制約なし
 a. ora are ki:de morae-de. ……………被希求者 = 有生
 私 - 主 彼 - 主 消えてもらいたい
 私は彼が消えてもらいたい。

- b. ora **aza** ki:-de morae-de. ……………被希求者 = 無生
私-主 痣-主 消えてもらいたい
私は痣が消えてもらいたい。

しかし、与格パターンでは、被希求者が無生であることは許されない。被希求者、すなわち補文の主語に対応する要素が無生名詞句の場合、もっぱら非与格パターンになる。

(30) 与格パターン:有生性制約あり

- a. ora **are-nge** ki:-de morae-de. ……………被希求者 = 有生
私-主 彼-与 消えてもらいたい
私は彼に消えてもらいたい。
- b. *ora **aza-sa** ki:-de morae-de. ……………被希求者 = 無生
私-主 痣-与 消えてもらいたい
私は痣に消えてもらいたい。
- cf. ora **aza** ki:-de morae-de.
私-主 痣-主 消えてもらいたい
私は痣が消えてもらいたい。

したがって、気象を表す動詞のように無生主語しかとらない動詞を含む場合、希求構文は非与格パターンでしか表すことができない。

- (31) a. ora **ame** huQ-te morae-de. ……………被希求者 = 主格
私-主 雨-主 降ってもらいたい
私は雨が降ってもらいたい。
- b. *ora **ame-sa** huQ-te morae-de. ……………被希求者 = 与格
私-主 雨-与 降ってもらいたい
私は雨に降ってもらいたい。
- c. ora **raesama** jaN-de morae-de. ……………被希求者 = 主格
私-主 雷-主 やんでももらいたい
私は雷がやんでももらいたい。

- d. *ora **raesama-sa** jaN-de morae-de. ……被希求者 = 与格
私 - 主 雷 - 与 やんでもらいたい
私は雷にやんでもらいたい。

この方言の複合型希求構文は、被希求者の格表示に関して、以下の制約を持っているものと考えられる。

(32) 有生性に関する制約:

補文の主語が無生名詞句の場合、与格被希求者に対応することができない。

希求構文の与格パターンには無生与格 (NP-sa) 被希求者がない。これは、複合型希求構文も単純型希求構文も同様である。

- (33) a. ora **are** sjkeN-sa ugaQ-te hosi:. ……非与格パターン
私 - 主 彼 - 主 試験 - 与 受かってほしい 被希求者 = 有生
私は彼が試験に受かってほしい。
- b. *ora **are-nge** sjkeN-sa ugaQ-te hosi:. ……与格パターン
私 - 主 彼 - 与 試験 - 与 受かってほしい 被希求者 = 有生
私は彼に試験に受かってほしい。
- (34) a. ora **ame** huQ-te hosi:. ……………非与格パターン
私 - 主 雨 - 主 降ってほしい。 被希求者 = 無生
私は雨が降ってほしい。
- b. *ora **ame-nge** huQ-te hosi:. ……………与格パターン
私 - 主 雨 - 与 降ってほしい。 被希求者 = 無生
私は雨に降ってほしい。

このことは、上記の制約が単純型希求構文にも関与的なためと考えることができる。

希求構文と同様に補文の主語を与格で表す構文に、他動詞文をもとにした使役文がある。他動詞文をもとにした使役文の場合、希求構文とは異なり、補文の主語に対応する与格名詞句は、名詞句の有生性によって、有生与格格助詞で

マークされたり，無生与格格助詞でマークされたりする。

- (35) a. ora **mango-nge** hagama hag-ase-da.

私－主 孫－与_{有生} 袴－対 はかせた (使役文)

……………被使役者＝有生与格

私は孫に袴をはかせた。

- b. ora **kuruma-sa** tsje:N hag-ase-da.

私－主 車－与_{無生} チェーン－対 はかせた (使役文)

……………被使役者＝無生与格

私は車にチェーンをはかせた。

補文の主語に対応する与格に関して，使役文と希求構文の違いをまとめると次のようになる。

- (36) 使役文と希求構文の与格表示の相違：

	使役文	希求構文
補文の主語が有生	有生与格	有生与格
補文の主語が無生	無生与格	……

上記の表の空所，すなわち希求構文の補文の主語が無生の場合，被希求者が与格ではなく主格になることは，すでに見たとおりである。希求構文の与格パターンは，補文の主語の有生性に関する制約のため，無生格の欠けた欠落的なパターンになっているのである。

なお，上では有生名詞として人間名詞を使った例だけを見てきた。そして，無生名詞の例としては，もの名詞や自然現象を表す名詞だけを見てきた。与格被希求者の名詞句階層 (Silverstein 1976) 上の分布を考えるために，動物名詞や植物名詞といった中間的な位置付けの名詞の例を見てみたい。

単文では，有生与格は人間名詞だけでなく，動物名詞や植物名詞をもマークすることがある。

- (37) a. **Nma-nge**(*-sa) mizu jar-u. …与格＝植物名詞 (単文)

馬－与_{有生} (*－与_{無生}) 水－対 やる

馬に水をやる。

- b. **hana**-{nge/-sa} mizu jar-u. …与格 = 植物名詞 (単文)
 花 {-与_{有生}/ -与_{無生}} 水-対 やる
 花に水をやる。
- c. **gohaN-sa**(*nge) naQto
 ご飯-与 納豆-対
 buQkage-ru.
 ぶっかける……………与格 = もの名詞 (単文)
 ご飯に納豆をぶっかける。

宮島 (1956) は、植物名詞が有生与格でマークされる現象を擬人化と見なし
 ている。実際、(37b) では、無生与格も使用可能である。

一方、複合型希求構文では、動物名詞は人間名詞と同様、有生与格でマーク
 することが可能だが、植物名詞は有生与格でマークされない。このような場合、
 植物名詞は無生与格ではなく主格で格表示される。

(38) 複合型希求構文における有生与格の分布:

- a. ora **ano Nma-nge** izibaN-ni
 私-主 あの馬-与 一番-位
 naQ-te morae-de.
 なってもらいたい……………被希求者 = 動物名詞
 私はあの馬に一番になってもらいたい。
- b. ora niwa-ni **hana** (*-nge/*-sa) sae-de morae-de.
 私-主 庭-位 花-主 (*与_{有生}/*与_{無生}) 咲いてもらいたい
 ………………被希求者 = 植物名詞
 私は庭に花が咲いてもらいたい。

上記の例文は、複合型希求構文では、有生与格の使用領域が、単文の場合よ
 りも名詞句階層上左側にずれていることを示している。

構文間での有生与格(-nge)の使用領域の違いを図示すると次のようになる。

(39) 有生与格-nge の分布	名詞句階層 (部分的) 人間 動物 植物 もの
単文 (3 項動詞文):	→
複合型希求構文:	→

上の図は、1つの言語体系の中でも、構文によって格形式の使用範囲がずれることがあることを示している。

3.3.2 意味役割と格の組み合わせに関する制約

補文の主語は、有生名詞句ならば、補文の述語の他動性やいわゆる「非対格性」に関係なく、与格で表すことができる。

- (40) a. ora **are-nge** kore kuQ-te morae-de. …与格パターン
私-主 彼-与 これ-対 食ってもらいたい
(補文の述語=他動詞)

私は彼にこれを食ってもらいたい。

- b. ora **nego-nge** nezumi-godo
私-主 彼-与 ねずみ-対
kuQ-te morae-de.与格パターン
食ってもらいたい (補文の述語 = 他動詞)
私は彼にねずみを食ってもらいたい。

私は彼にねずみを食ってもらいたい。

- c. ora hajag-u **jome-nge** mango-godo
私-主 早く 嫁-与 孫-対
nasj-te morae-de.与格パターン
生んでもらいたい (補文の述語=他動詞)
私は早く嫁に孫を生んでもらいたい。

私は早く嫁に孫を生んでもらいたい。

- (41) a. ora **are-nge** sogo-sa
私-主 彼-与 そこ-与
suwa^Q-te morae-de. 与格パターン
座ってもらいたい (補文の述語 = 動作主主語自動詞)
私は彼にそこに座ってもらいたい。

私は彼にそこに座ってもらいたい。

- b. ora tsungi-wa **are-nge**
 私-主 次-トピック 彼-与
 hasiQ-te morae-de.与格パターン
 走ってもらいたい (補文の述語=動作主主語自動詞)
 私は次は彼に走ってもらいたい。
- (42) a. ora **are-nge** sjkeN-ni
 私-主 彼-与 試験-位
 ozi-demorae-de.与格パターン
 落ちてもらいたい (補文の述語=対象主語自動詞)
 私は彼に試験に落ちてもらいたい。
- b. ora **are-nge** sjkeN-ni
 私-主 彼-与 試験-位
 ugaQ-te morae-de.与格パターン
 受かってもらいたい (補文の述語=対象主語自動詞)
 私は彼に試験に受かってもらいたい。
- c. ora **ome-nge** sogo-ni
 私-主 お前-与 そこ-位
 e-de morae-de.与格パターン
 いてもらいたい (補文の述語=対象主語自動詞)
 私はお前にそこにいてもらいたい。
- (43) 与格パターン (補文の述語=心理動詞)
- a. ora **are-nge** taziba
 私-主 彼-与 立場-対
 wagaQ-te morae-de.与格パターン
 わかってもらいたい (補文の述語=心理述語)
 私は彼に立場をわかってもらいたい。
- b. ora **are-nge** sore-ni
 私-主 彼-与 それ-位
 kizue-de morae-de.与格パターン
 気づいてもらいたい (補文の述語=心理述語)
 私は彼にそれに気づいてもらいたい。

cf. are ima-made sore-ni kitska-nagaQ-ta.

彼－主 今まで それ－位 気づかなかった

彼は今までそれに気づかなかった。

<主格(経験者)-位格(対象)>格フレーム

上の例では、補文の主語は動作主を表す場合(他動詞, 「非能格動詞」) あれば対象を表す場合(「非対格動詞」) も経験者を表す場合(心理動詞) もある。

一方、次の例文から明らかなように、補文の主語が有生の場合でも、与格パターンが不可能な場合がある。補文が受動文の場合と位格動作主を含む自動詞の場合である。

(44) 補文が受動文の場合: 与格パターン不可能

a. ora haNniN ziNsa-ni

私－主 犯人－主 巡査－位

taeho s-are-de morae-de.

逮捕されてほしい……………被希求者 = 主格

私は犯人が巡査に逮捕されてほしい。

b. *ora haNniN-nge ziNsa-ni

私－主 犯人－与 巡査－位

taeho s-are-de morae-de.

逮捕されてほしい……………被希求者 = 与格

私は犯人に巡査に逮捕されてほしい。

(45) 補文が位格動作主を含む格フレームの場合: 与格パターン不可能

a. ora are onī-ni

私－主 彼－主 鬼－位

meQkaQ-temorae-de.

見つかってもらいたい……………被希求者 = 主格

私は彼が鬼に見つかってもらいたい。

b. *ora **are-nge** oni-ni

私－主 彼－与 鬼－位

meQkaQ-te morae-de.

見つかってもらいたい……………被希求者＝与格

私は彼が鬼に見つかってもらいたい。

これに対し、対応する能動文および共通する語幹を含む他動詞が補文の場合は、与格パターンが可能である。

(46) (44) に対応する能動文

ora **ziNsa-nge** haNniN-godo taeho sj-te morae-de.

私－主 巡査－与 犯人－対 逮捕してもらいたい

私は巡査に犯人を逮捕してもらいたい。

(47) (45) と共通する語幹を含む他動詞

ora **oni-nge** are-godo meQke-de morae-de.

私-主 鬼-与 彼-対 見つけてもらいたい

私は鬼に彼を見つけてもらいたい。

受動接辞のついた taeho s-are-ru (逮捕される) と形態論的には能動の meQkar-u (見つかる) には意味役割と格形式の組み合わせで共通する部分がある。それは、両者とも動作主と対象という 2 つの項を持ち、動作主が位格で現れ、対象が主格で現れる点である。同様に動作主と対象を含む構文でも、他動詞文では、動作主は主格で現れ対象は対格で現れる。つまり、受動文と meQkar-u タイプの自動詞文は、意味役割と格形式の対応関係が、対応する能動文や他動詞文と逆になっているのである。

(48) a. 他動詞 (能動) における意味役割と格の結びつき

(taeho su-ru, meQke-ru)

<動作主 対象>

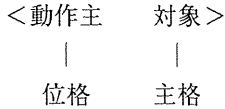
|

主格

|

対格

b. 受動文および meQkar-u における意味役割と格の結びつき



補文の主語が対象を表すとき、全ての場合で与格パターンが排除されるわけではない。既に見たように、動作主を含まない項構造の述語が埋め込まれた場合は、与格パターンが可能な場合がある。これは、前出の「非対格述語」を埋め込んだ与格ターンを見れば明らかである。⁵ 与格パターンが不可能なのは、補文に対象を表す主語と動作主を表す位格名詞句が含まれている場合である。このことは、与格パターンの成立条件が、補文の主語の意味的特性のみによって記述することができないことを意味する。意味役割と格の結びつきに関しては、次のような形で、補文全体の構造に言及する必要がある。

(49) 補文における意味役割と格の結びつきに関する制約:

補文が、＜主格（対象）、位格（動作主）＞という格フレームになっている場合、述語が形態論的に受動であるか否かに関わらず、複合型希求構文は与格パターンをとることができない。

結果: 受動文や meQkar-u のような述語が埋め込まれた場合、与格パターンは不可能。非与格パターンがとられる。

3.3.3 与格パターンに関する制約のまとめ

以上、与格パターンには、補文の主語の有生性に関する制約と補文の格フレームに関する制約が関与的であることを見てきた。これまでに上げた2つの制約のいずれかに違反する場合は、非与格パターンがとられる。

すでに述べたが、ここで挙げた制約が、複合型希求構文の格フレームに関与的な制約のすべてではないだろう。ここでは「どのような場合に与格パターンを用いることができないのか」というネガティブな制約のみを示すにとどまっ

⁵Harada (1977)は、標準語の希求構文に関して、与格パターンが可能なのは、補文の述語あるいは補文全体が自己制御可能 (self-controllable) な解釈の場合に限られるという一般化を行っている。水海道方言の希求構文には、この一般化に反する例もある。(42a)と(42b)に示した例がそれである。「(試験に)落ちる」や「(試験に)受かる」という行為は、自己制御可能な行為ではない。

たが、「どのような場合に与格パターンが好まれるのか」、「どのような場合に非与格パターンを用いることができないのか」といった面についても追求する必要がある。このような問題については今後の課題としたい。

4 否定対極表現の分布

次に見る否定対極表現の分布は、2つの格パターンが、否定のスコープに関して異なることを示すものである。これは、意味役割や有生性とは異なる意味の領域でも、2つの格パターンに違いがあることを意味する。また、否定対極表現の分布は、補文の主語に対応する要素の統語論上の位置付けを考える上でも重要である。複合述語文には、否定接辞が主節の述語にしか付属しないものと、補文の述語と主節の述語の両方に付属するものの2種類がある。前者では、否定接辞の分布によるスコープの差異を調べることができないが、後者では可能である。複合型希求構文は後者に属する。

4.1 否定対極表現の一般的特性

否定対極表現 (negative polarity item) は、否定環境にのみ現れる表現である。英語の *lift a finger*, 標準語の「指一本」などがそれである。否定対極表現は、様々な言語の様々な品詞に存在する。ここでは、水海道方言の否定対極表現 *dare*-(格助詞-) *mo* (誰も), *nani*-(格助詞-) *mo* を例に、この方言における否定対極表現と否定接辞の分布を示すことにする。

以下の例が示すように否定対極表現は、否定接辞を伴う述語と共起する。

- (50) a. **dare-mo ki-ne**
 誰－主－も 来ない
 誰も来ない。
- b. ***dare-mo ku-ru.**
 誰－主－も 来る
 誰も来る。
- (51) a. **are nani-mo kuwa-ne.**
 彼－主 何－対－も 食わない
 彼は何も食べない。

- b. *are **nani-mo** kuː.

彼－主 何－対－も 食う

彼は何も食う。

以下の例文が示すように、補文の述語に否定接辞がついている場合、否定対極表現は補文の中には現れるが、主節には現れることができない。

- (52) a. ora [**dare-mo** ki-ne-Qte] iQ-ta.

私－主 誰－主－も 来ないって 言った

私は誰も来ないって言った。

- b. ***dare-mo** [are ki-ne-Qte] iQ-ta.

誰－主－も 彼－主 来ないって 言った

誰も彼が来ないって言った。

また、主節の述語に否定接辞がついている場合、否定対極表現は主節には現れるが、補文の中には現れることがない。

- (53) a. **dare-mo** [are ku-ru-Qte] iwa-**nagaQ**-ta.

誰－主－も 彼－主 来るって 言わなかった

誰も彼が来るって言わなかった。

- b. *ora [**dare-mo** ku-ru-Qte] iwa-**nagaQ**-ta.

私－主 誰－主－も 来るって 言わなかった

私は誰も来るって言わなかった。

以上の例は、補文でも時制を表すことができるタイプの複文である。この種の構文では、否定対極表現は、否定接辞と同じ節の中に現れるのが一般的である。複合型希求構文を含む複合述語文は、2つの文を含む構造が仮定される点で上記の構文と共通しているが、時制を表す要素が主節にしか現れない点で、上記の構文とは異なる。否定対極表現の分布も、時制のある補文をとる構文と時制のない補文をとる構文とでは違いがある。次に複合述語文における否定対極表現の分布を見ることにする。

4.2 複合型希求構文における分布

主節と補文の双方で時制を表すことができる複文の場合、否定対極表現は否定接辞と同じ節の中にだけ現れる。一方、時制が主節でしか表せない複合型希求構文では、否定対極表現は、次のような分布を示す。

複合型希求構文では、否定接辞が主節の述語に付属する場合、否定対極表現は、文中のどの要素としても現れることができる。

- (54) a. **dare-mo** are (-nge) kj-te morae-daga-**ne**. …主節の主語
誰-主-も 彼-主(与) 来て もらいたくない
誰も彼 [が/に] 来てもらいたくない。

- b. ora **dare-nge-mo** kj-te morae-daga-**ne**. …与格被希求者
私-主 誰-与-も 来て もらいたくない
私は誰にも来てもらいたくない。

- c. ora **dare-mo** kj-te morae-daga-**ne**. ……非与格被希求者
私-主 誰-主-も 来て もらいたくない
私は誰も来てもらいたくない。

- d. ora **dare-nge-mo** sore
私-主 誰-与-も それ-対
kuQ-te morae-daga-**ne**.
食って もらいたくない……………与格被希求者
私は誰にもそれを食べてもらいたくない。

- e. ora **dare-mo** sore
私-主 誰-主-も それ-対
kuQ-te morae-daga-**ne**.
食って もらいたくない……………非与格被希求者
私は誰もそれを食べてもらいたくない。

- f. ora are (-nge) **nani-mo**
私-主 彼-主(与) 何-対-も
kuQ-te morae-daga-**ne**.
食って もらいたくない……………補文の補部
私は彼 [が/に] 何も食べてもらいたくない。

一方、否定接辞が補文の述語に付属する場合、補文の補部や非与格被希求者に付属することはできるが、主節の主語や与格被希求者に付属することはできない。

- (55) a. ***dare-mo** are (-nge) ki-**ne-de** morae-de. ……主節の主語
誰－主－も 彼－主(与) 来ないで もらいたい
誰も彼 {が/に} 来ないでもらいたい。
- b. *ora **dare-nge-mo** ki-**ne-de** morae-de. ……与格被希求者
私－主 誰－与－も 来ないで もらいたい
私は誰にも来ないでもらいたい。
- c. ora **dare-mo** ki-**ne-de** morae-de. ……非与格被希求者
私－主 誰－主－も 来ないで もらいたい
私は誰も来ないでもらいたい。
- d. *ora **dare-nge-mo** sore
私－主 誰－与－も それ－対
kuwa-**ne-de** morae-de.
食わないで もらいたい ……与格被希求者
私は誰にもそれを食わないでもらいたい。
- e. ora **dare-mo** sore
私－主 誰－主－も それ－対
kuwa-**ne-de** morae-de.
食わないで もらいたい ……非与格被希求者
私は誰もそれを食わないでもらいたい。
- f. ora are (-nge) **nani-mo**
私－主 彼－主(与) 何－対－も
kuwa-**ne-de** morae-de.
食わないで もらいたい ……補文の補部
私は彼 {が/に} 何も食わないでもらいたい。

つまり、与格パターンと非与格パターンとでは否定対極表現の分布が異なるのである。

既に見たように、標準語と異なり、水海道方言では斜格主語をとる述語が補

文に現れる場合でも、与格パターンと非与格パターンが格形式上区別される。
wagar-u を補文の述語とする場合、被希求者は与格パターンでは与格で、非
与格パターンでは経験者格で現れる。この場合も2つの格パターンでは、否定
対極表現の分布が異なる。

(56) a. ora **dare-nge-mo**

私－主 誰－与－も

wagaQ-te morae-daga-ne.

わかって もらいたくない……………与格パターン

私は誰にもわかってもらいたくない。

b. *ora **dare-nge-mo**

私－主 誰－与－も

wagaN-ne-de morae-de.

わからないで もらいたい ……………与格パターン

私は誰にもわからないでもらいたい。

(57) a. ora **dare-ngani-mo**

私－主 誰－経－も

wagaQ-te morae-daga-ne.

わかって もらいたくない ……………非与格パターン

(被希求者＝経験者格)

私は誰にもわかってもらいたくない

b. ora **dare-ngani-mo**

私－主 誰－経－も

wagaN-ne-de morae-de.

わからないで もらいたい……………非与格パターン

(被希求者＝経験者格)

私は誰にもわからないでもらいたい。

与格パターンでは、否定接辞が主節の述語に付属する場合しか、否定対極表現は被希求者の位置に現れ得ない。与格パターンでは、補文の述語に否定接辞が付属する場合は、被希求者は否定対極表現として現れることができない。一

方、非与格パターンでは、否定接辞が主節の述語に付属する場合でも補文の述語に付属する場合でも、被希求者は否定対極表現になることができる。

この分布を表にすると次のようになる。NPIは否定対極表現を表すものとし、「*」は、否定対極表現が現れ得ない位置を示すものとする。与格パターンと非与格パターンで分布の違いが出る部分を楕円で囲んだ。

(58)		否定対極表現の分布			否定辞の分布	
		希求者 (主節の主語)	被希求者	補文の 補部	補文の 述部	主節の 述部
	与格パターン	NPI	NPI	NPI	…	否定辞
		*	○*	NPI	否定辞	…
	非与格パターン	NPI	NPI	NPI	…	否定辞
		*	○NPI	NPI	否定辞	…

複合型希求構文でも、補文に否定接辞が現れる場合は、否定対極表現は補文の要素としてしか現れない。一方、否定接辞が主節の述語に付属する場合は、否定対極表現は、主節の要素としてだけでなく、補文の要素としても現れることができる。

否定対極表現の分布は、2つの格パターンにおける被希求者の統語論上の位置づけを考える上で重要である。否定対極表現は、一般に、否定のスコープの内部に現れるものと考えられている。(58)の表を見ると、非与格被希求者は、補文の否定のスコープに含まれるが、与格被希求者は補文の否定のスコープに含まれないことがわかる。補文の否定のスコープに含まれない点で、与格被希求者は、主節の主語と同様である。

先に、*morae-de*の格フレームや非与格パターンにおける被希求者の格形式のバリエーションから、与格被希求者の格表示は主節の述語に依存し、非与格被希求者の格表示は補文の述語に依存するものと分析した。否定対極表現の分布は、この分析の傍証となる。なぜなら、ここでも非与格被希求者は補文の述部と主節の述部の両方によって統語論上の振る舞いが規定され、与格被希求者は、もっぱら主節の述部によって統語論上の振る舞いを規定されるからである。

被希求者に再帰代名詞が含まれる場合、主節の主語（希求者）が先行詞として解釈される。

- (60) a. ome_i zibuN_i-no oja-nge esu-sa
 お前－主 自分の親－与 いす－与
 suwaQ-te morae-daga-ne-ga ?
 座ってもらいたくないか
 お前は自分の親にいすに座ってもらいたくないか？
- b. ome_i zibuN_i-no oja esu-sa
 お前－主 自分の親－主 いす－与
 suwaQ-te morae-daga-ne-ga ?
 座ってもらいたくないか
 お前は自分の親がいすに座ってもらいたくないか？

一方、補文の補語に再帰代名詞が含まれる場合、被希求者は、与格パターンの場合であれ非与格パターンの場合であれ、その先行詞になり得る。

- (61) a. ora_i are_j zibuN_i/_j-no isu-sa
 私－主 彼－主 自分のいす－与
 suwaQ-te morae-de.
 座ってもらいたい……………非与格パターン
 私は彼が自分にいすに座ってもらいたい。
- b. ora_i are_j-nge zibuN_i/_j-no isu-sa
 私－主 彼－与 自分のいす－与
 suwaQ-te morae-de.
 座ってもらいたい……………与格パターン
 私は彼に自分にいすに座ってもらいたい。
- (62) a. ora_i are_j-ngani zibuN_i/_j-no taziba
 私－主 彼－経 自分の立場－対
 wagaQ-te morae-de.
 わかってもらいたい……………非与格パターン
 私は彼に自分の立場をわかってもらいたい。

b. ora_i are_j-nge zibuN_i/_j-no taziba

私-主 彼-与 自分の立場-対

wagaQ-te morae-de.

わかってもらいたい……………与格パターン

私は彼に自分の立場をわかってもらいたい。

非与格パターンの被希求者の格形式が、補文の述語の単独用法における主語の格形式と同じであることはすでに述べた。再帰代名詞の先行詞になり得る点でも非与格パターンの被希求者は、単文の主語と同様である。このことから、非与格パターンの被希求者が再帰代名詞の先行詞になり得るのは、補文の主語であるためと考えることができる。

単文における与格名詞句は再帰代名詞の先行詞にはなれない。しかし、上の例文から明らかなように、与格被希求者は、形の上では与格であるにもかかわらず、再帰代名詞の先行詞になることができる。再帰代名詞の解釈を表にまとめると次のようになる。

(63) 希求構文における再帰代名詞の解釈:与格パターン非与格パターンとも同じ

		再帰代名詞		
		希求者	被希求者	その他
先行詞	希求者 _i		[zibuN _i ...]NP	[zibuN _i ...]NP
	被希求者 _j			[zibuN _j ...]NP

希求者 = 主節の主語, 被希求者 = 補文の主語に対応

単文では再帰代名詞の先行詞として解釈されない要素が、複合述語文では再帰代名詞の先行詞になり得るという現象は、複合型希求構文以外の構文でも見られる。以下に、使役文、受益構文、間接受動文の例を挙げる。

(64) ora_i are_j-nge zibuN_i/_j-no hku ara-:se-da. ……………使役文

私-主 彼-与 自分の服-対 洗わせた

与格被使役者

私は彼に自分の服を洗わせた。

- (65) ora
- _i
- are
- _j
- ni zibuNi/
- _j
- no hoN

私－主 彼－位 自分の本

toQ-te moraQ-ta. 受益構文

とってもらった

位格動作主

私は彼に自分の本をとってもらった。

- (66) 間接受動文：位格動作主

ora seNse:_i-ni zibuN_i-no sengare-godo bagari

私－主 先生－位 自分の息子－対 ばかり

home-rare-de, sjagu-ni sa:Q-ta.

褒められて 癪に障った

私は先生に自分の息子ばかり褒められて、癪に障った。

(64) では、使役者（主格）の他、与格被使役者が再帰代名詞の先行詞として解釈されている。与格名詞句が単文では再帰代名詞の先行詞として解釈されないことは、既に見たとおりである。(65) と (66) では、位格動作主が、再帰代名詞の先行詞として解釈可能である。次の例文が示すように、位格名詞句は、その意味役割が動作主であっても、単文では再帰代名詞の先行詞になることがない。

- (67) ora
- _j
- are
- _j
- ni zibuNi/
- _j
- no singodo osaQ-ta.

私－主 彼－位 自分の仕事－対 教わった

私は彼に自分の仕事を教わった。

与格被希求者は、与格名詞句であるにもかかわらず再帰代名詞の先行詞として解釈され得る点で、他の複合述語文の斜格名詞句の場合と同様である。これらの要素は、補文の主語と対応する要素である。

標準語では、これらの複合述語文は、主節の補部が補文の主語をコントロールする二重節的 (biclausal) な構造を持っているものと考えられてきた（使役文と受益構文に関しては、Matsumoto (1996) 及びそこで引用されている文献を参照。また、間接受動文に関しては、Dubinsky (1997) 及びそこで引用されている文献を参照）⁶。

水海道方言の複合型希求構文に関しても、以下に図示するように、与格被希求者が補文の主語をコントロールする二重節的な構造を仮定してみよう。構造

の上側の矢印はコントロールを、下側の矢印は格付与を表すものとする。

- (68) a. [NP-主 NP-与 [[↓] 主語... V-te] morae-de] 与格パターン
 ↑
 b. [NP-主 [NP-主/経...V-te] morae-de] …非与格パターン
 ↑

上のスキーマを仮定するならば、与格被希求者が再帰代名詞の先行詞になり得るのは、コントロールの対象となっている補文の主語の統語特性の現われと考えることができる。このように考えるならば、「再帰代名詞の先行詞になり得る要素は主語的要素」という単文をもとに確立した一般化は、希求構文においても当てはまることになる。また、上記のスキーマを仮定することは、希求構文における再帰代名詞の解釈の曖昧性も捉えることができる。これまでに見た、希求構文の例文では、いずれの場合も再帰代名詞の先行詞は2つの可能性があった。主節の主語と被希求者である。上記のスキーマでは、希求構文には主節の主語と被希求者（補文の主語に対応する要素）という2つの主語的要素があることになる。希求構文において再帰代名詞の先行詞に2通りの解釈があり得るのは、この構文に2つの主語があるためと考えることができる。

5.2 遊離数量詞

次に複合型希求構文における遊離数量詞について記述する。

単文においては、遊離数量詞は、主格名詞句や対格名詞句といった直接格名詞句としか同一指標を持つことができない。

⁶なお、直接受動文は、同じ受動文でも間接受動文の場合と異なり、位格動作主が再帰代名詞の先行詞になることはない。

(i) zibuN_i-no sengare are_i-ni buQkuras-are-da.

自分の息子-主 彼-位 殴られた

自分 (= 話者) の息子が彼に殴られた。

直接受動文である上記の例文の再帰代名詞は、位格でマークされている「彼」と同一人物として解釈されることはない。この場合、再帰代名詞の先行詞のもっとも自然な解釈は、この文の話者である。直接受動文が、他の複合述語文と異なり、単文の主語と対応する斜格名詞句が、再帰代名詞の先行詞になることがないのは、二重節 (biclausal) な構造を持っていないためと考えられる。直接受動文と間接受動文の統語構造の違いについては、別な機会に改めて追求することにしたい。

- (69) a. mango_i saNniN_i togonoma-de ne-de-ru. ……主格
 孫-主 3人 床の間-具 寝ている
 孫が3人床の間で寝ている。
- b. seNse: gakse:ra-godo saNniN_i igiN-da. ……対格
 先生-主 学生たち-対 3人 叱った
 先生が学生たちを3人叱った。
- c. *mango-nge_i saNniN_i ame jaQ-ta. ……与格
 孫-与 3人 飴-対 やった
 孫に3人飴をやった。
- d. *aezura-nganja saNniN_i ojong-e-me. ……経験者格
 あいつら-経-トピック 3人 泳げないだろう
 あいつらには3人泳げないだろう。
 cf. aezura-nganja ojong-e-me.
 彼らには泳げないだろう。

経験者格名詞句や与格名詞句とった斜格名詞句は、単文では遊離数量詞と同一指標を持つことがない。なお、与格名詞句は無生与格(NP-sa)の場合、次の例文に見るように、遊離数量詞と同一指標を持つことがあるが、有生与格(NP-nge)の場合、遊離数量詞と同一指標を持つことはない。

- (70) a. ora nomija-sa saNgeN_i iQ-ta.
 私-主 飲み屋-与_{無生} 3軒 行った
 私は飲み屋に3軒行った。

すでに述べたように、希求構文では被希求者は、有生与格でマークされることはあるが無生与格でマークされることはない。単文において有生与格名詞句が決して遊離数量詞と同一指標を持つことがないことは、希求構文における遊離数量詞の分布と対比する上で重要である。

以下に複合型希求構文における遊離数量詞の例文をあげる。

- (71) a. ora gakse:-nge saNniN_i kj-te morae-de. ……与格パターン
 私-主 学生-与 3人 来てもらいたい
 私は学生に3人来てもらいたい。

- b. ora gakse: saNniN_i kj-te morae-de. …非与格パターン
私-主 学生-主 3人 来てもらいたい
私は学生が3人来てもらいたい。
- c. *ora mango-ngani saNniN-ngure: ore-nga
私-主 孫-経 3人ぐらい 私-所
hanasi wagaQ-te morae-de.
話-対 わかってもらいたい
私は孫に3人ぐらい私の話をわかってもらいたい。

非与格パターンの場合、被希求者が主格の場合は、遊離数量詞と同一指標を持つことが可能だが、経験者格の場合は、不可能である。直接格（この場合、主格）の場合、遊離数量詞と同一指標を持つことができ、斜格（この場合、経験者格）の場合、それが不可能なわけである。これは、単文における遊離数量詞の分布と同様である。一方、与格パターンの被希求者は、斜格（与格）であるにも関わらず遊離数量詞と同一指標を持つことができる。これは、単文における遊離数量詞の振る舞いとは異なる。単文では与格、とりわけ有生与格名詞句が遊離数量詞と同一指標を持つことがないことは、すでに見たとおりである。

遊離数量詞に関する希求構文の与格被希求者の振る舞いは、一見例外的に見える。標準語の希求構文（～てほしい）でも与格被希求者はこの点に関して同様の振る舞いをするようである（Harada 1977 参照）。遊離数量詞に関する例外性を説明するために、Harada (1977) は、与格被希求者が深層構造では補文の主語ではあるが与格ではないため、遊離数量詞と同一指標を持つことができるという説明を行っている。この見方では、与格被希求者の与格は、深層構造から表層構造への派生の過程で付与されたものということになる。本稿のようにコントロールを含む構造を仮定するならば、このような派生を仮定することなく、与格被希求者の振る舞いを「斜格名詞句は遊離数量詞と同一指標を持つことがない」という一般化に対する例外にしないで済む。遊離数量詞と同一指標をもつことができるのは、与格被希求者にコントロールされている補文の主語の特性であると考えることができるからである。

なお、斜格名詞句が遊離数量詞と同一指標を持ち得るのは、複合型希求構文の場合だけではない。使役文や受益構文そして間接受動文にも共通の特徴である。

- (72) ora wagesi-nge saNniNi te'go
 私-主 若者-与 3人 太鼓-対
 tadag-ase-da.使役文
 たたかせた 与格被使役者
 私は若者に3人太鼓をたたかせた。
- (73) ora wagesi-ni saNniNi singodo
 私-主 若い衆-位 三人 仕事-対
 tezudaQ-te moraQ-ta.受益構文
 手伝ってもらった 位格動作主
 私は若い衆に3人仕事を手伝ってもらった。
- (74) ora kaenego-ni saNpjki sin-are-da.間接受動文
 私-主 飼い猫-位 3匹 死なれた 位格対象
 私は飼い猫に3匹死なれた。

使役文の与格被使役者、受益構文や間接受動文の位格動作主/対象はいずれも補文の主語に対応する要素である。斜格であっても遊離数量詞と同一指標を持つことができるということは、補文の主語をコントロールしている主節の補部に共通する特徴である。したがって、遊離数量詞に関する与格被希求者の例外的な振る舞いをコントロールしている補文の主語の特性とする本稿の分析は、決して ad hoc なものではない。

5.3 被希求者の統語論上の振る舞いのまとめ

この節では、再帰代名詞の解釈及び遊離数量詞との関係という2つの統語論上の現象について記述してきた。両者とも文中の2つの要素の同一指示に関する現象である。与格被希求者と非与格被希求者は、ともに、再帰代名詞の先行詞となることができる。また、ともに遊離数量詞と同一指標を持つことができる。単文でこの2つの特性を持つ名詞句は、主語である。被希求者は与格の場合であれ非与格の場合であれ、補文の主語に対応する要素である。非与格被希求者は、それ自体が補文の主語である。与格被希求者は、主節の要素だが、補文の主語をコントロールする要素でもある。与格被希求者と非与格被希求者は、関係のあり方こそ異なるが、補文の主語と結びついている点では共通の要素で

ある。与格被希求者と非与格被希求者に共通する統語論上の振る舞いは、両者がともに結びついている補文の主語の特性と考えることができる。

前節（否定対極表現に関する節）では、与格パターンと非与格パターンの相違について記述した。非与格被希求者は補文の否定のスコープに入るが、与格被希求者は入らない。これは、与格被希求者と非与格被希求者が統語論上の位置づけが異なるためである。格表示から、与格被希求者は主節の要素、非与格被希求者は補文の要素と考えられる。与格被希求者と非与格被希求者の統語論上の差異は、この構造上の差異を反映しているものと見ることができる。

(68) のスキーマは、2つの格フレームの共通点と相違を捉える上で有効なものと考えられる。

次の節では、本稿の分析とは逆の構造を想定する分析について検討することにした。

6 異なる分析

複合型希求構文の統語現象を記述する中で、(68) に示したスキーマを想定してきた。このスキーマでは、与格被希求者は、主節の述語に格表示を依存している点で主節の要素であると同時に、補文の主語をコントロールしている点で補文とも関係を持っている要素と位置付けられる。一方、非与格被希求者（主格/経験者格）は、補文の主語の位置にある要素と位置付けられる。これとは全く逆の分析が、標準語では提案されている。Harada (1977) 及び Takezawa (1987) らの分析である。この節では、こうした分析がこの方言にも適用可能かどうか検討したい。

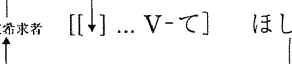

結論としては、Harada や Takezawa の分析ではこの方言の希求構文に関して妥当な分析が困難なことが明らかになるだろう。しかし、水海道方言のデータに当てはまらないからといって、彼らの分析の妥当性が否定されるわけではない。水海道方言と標準語は異なる言語体系だからである。ただ、分析の普遍性が疑われるだけである。彼らの分析に対する直接的な批判は標準語のデータをもとになされなければならない。この節の最後で、この方言の記述から得られた観点から、標準語の希求構文のデータについて考えてみたい。

標準語の希求構文（～てほしい）に関しては、2通りの分析が提唱されてきた。1つの分析は、本稿の分析と同様に、与格被希求者が主節の述語に格付与され、非与格被希求者が補文の述語に格付与されるとする分析である。Nakau

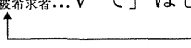
(1973), Muraki (1978), 柴谷 (1978), McCawley & Momoi (1986) 及び Matsumoto (1996) が, この分析を提唱している。もう 1 つの分析は, これとは逆に, 与格被希求者が補文で格付与され, 非与格被希求者が主節の述語によって格付与されるという分析である。Harada (1977), Takezawa (1987) 及び竹沢 & Whitman (1998) にこの分析が見られる。⁷ 双方の分析の提唱者と論文の発行年からわかるように, 様々な立場の研究者が 2 つの分析の何れかを提唱してきた。2 つの分析は, 特定の時代でだけ問題になったわけでもなく, 特定の理論の間の対立として見るべきものでもない。標準語に関して 2 つの分析がこの四半世紀併存してきたのは, 後述するように, 標準語の形式面に関する限り, どちらの分析でも記述できるからと思われる。

2 つの分析を図式化すると次のようになる。本稿の分析とほぼ同じ分析は, Matsumoto (1996) に見られる。与格被希求者と補文の主語の関係を, コントロールとして捉えるか同一名詞句削除として捉えるかの違いはあるものの, Nakau らも同様の分析である。ここではコントロールとして捉える分析で代表させることにする。また, これと逆の分析に関しては, Takezawa (1987) の分析で代表させることにする。また, 下のスキーマでは, 2 つの分析の差異を提示する都合上, 例を標準語とし, 「～てほしい」型の希求構文で示す。非与格パターンについては主格で代表させることにする。⁸

(75) 本稿と同じ分析:


- a. [NP_{希求者} NP_{被希求者} [[↓] ... V-て] ほしい] 与格パターン
 ← 格付与 (与格)
- b. [NP_{希求者} [NP_{被希求者} ... V-て] ほしい] 非与格パターン
 ← 格付与 (主格, 経験者格)

(76) Takezawa (1987) の分析:

- a. [NP_{希求者} [NP_{被希求者} ... V-て] ほしい] 与格パターン
 ← 格挿入 (与格)

⁷竹沢・Whitman (1998) は, 2 人の著者が, 前半と後半を分担する構成になっている。問題の分析の箇所は, 竹沢幸一の分担箇所にあるので, そこで展開されている分析は, 著者の博士論文 (Takezawa 1987) を継承したものと考えていいだろう。

⁸標準語の場合, 経験者格と与格の対立がないため, いわゆる与格主語構文を補文とする場合, どちらの格パターンかはっきりしないことは既に述べた。

- b. [NP_{希求者} [NP_{被希求者}...V-て] ほしい]非与格パターン
 ← (例外的) 格付与 (主格)

本稿と同様の分析については、(68) の繰り返しになるので、解説を行わない。ここでは Takezawa (1987) の分析について概観する。

Takezawa (1987) の分析では、与格被希求者と非与格被希求者はともに補文の内部の要素と見なされている。格形式の違いは、次のように説明されている。被希求者が、与格になるのは、補文が S' (=CP) のときであり、主格になるのは S (=IP) のときであるという。与格被希求者は、「に-挿入規則」によって格が付与されるものと想定されている。「に-挿入規則」は補文の主語に対応する与格名詞句といわゆる与格主語を統一的に扱うために提案されたメカニズムである。次の2つの前提のもと、格フィルターに対する違反を避けるために、「に-挿入規則」による与格の挿入が生じるという。(i) 時制のある屈折要素 (Infl) によって統率されていない主語は、主格を付与されない。(ii) この場合の主語は、格のない名詞句であるため、そのままでは格フィルターに違反する。与格経験者 (与格主語) そして与格被使役者や与格被希求者といった要素が、この規則によって与格を付与されているという。

- (77) a. 彼には ロシア語がわからない。.....<与格経験者>
 b. 彼に ロシア語を学ばせる。.....<与格被使役者>
 c. 彼に そこにいてほしい。.....<与格被希求者>

これらの与格名詞句は、再帰代名詞の先行詞になることができる点などで共通した振舞いをする。Takezawa (1987) によれば、与格被希求者の格付与は、補文の内部で完結していることになる。

一方、非与格被希求者は、与格被希求者と同様に補文の内部にありながら、格は、主節の述語によって付与されているという。このような節の境界を越えた格付与は、生成文法では「例外的格付与」と呼ばれている。例外的格付与は、もともとは主語-目的語繰り上げ構文を分析するために提案されたメカニズムである (Chomsky 1981等参照)。「思う」などの思考動詞が補文をとる構文では、一定の条件の下で補文の主語が対格でマークされることがある。例外的格付与は、このような場合に、主節の述語が「例外的に」補文の内部にある名詞句に対格を付与するとする見方である。

- (78) a. 私は「彼女が美しいと」思った。……………＜補文内部での格付与＞
 b. 私は「彼女を美しいと」思った。……………＜例外的格付与＞

非与格パターンに関する Takezawa の分析は、このメカニズムを希求構文にも拡大適用したものである。主語-目的語繰り上げ構文と違って希求構文では例外的格付与によって主格が付与される。これは、「ほしい」が状態述語であるためであるという。

(75) と (76) に示した分析は、格付与に関して逆の立場をとっている。しかしながら、標準語の格フレームを見る限り、どちらの分析でも予測することが可能である。したがって、標準語の希求構文の形式面だけを見る限りでは、2つの分析は甲乙付けがたい。

以下、Takezawa (1987) の分析が水海道方言にも当てはまるかどうか検討することにする。比較の対象になる (75) の分析については、既にこれまでの節で見てきたので繰り返さない。

まず、格フレームに関して。水海道方言の与格パターンを Takezawa の提案した分析で記述しようとするときのような問題が生じる。Takezawa が与格パターンの格表示のメカニズムとして仮定した「に-挿入規則」は、斜格経験者と与格被希求者などを統一的に扱うための規則であった。標準語では、心理述語の斜格経験者と与格被希求者のいずれもが「に」(与格)でマークされるので、これらの要素を単一のメカニズムで格付与しても現実にあう結果が得られる。一方、水海道方言では、心理動詞の斜格経験者は経験者格 (NP-ngani) でマークされ、与格被希求者は与格 (NP-nge) でマークされる。つまり、この方言では、斜格経験者と与格被希求者が形式上区別されているのである。水海道方言でこれらの要素を「に-挿入規則」と並行的なメカニズムで格付与するためには、「心理述語の場合、経験者格が挿入され、それ以外なら与格が挿入される」といった付加的な条件付けが必要になる。これは実質的には、2つの斜格挿入のメカニズムを想定することになり、主語的に機能する斜格名詞句への統一的な格付与ではなくなってしまう。したがって、この方言に関しては、単一のメカニズムで斜格経験者(心理述語文)と与格被希求者の格付与を説明することは困難である。

これに対し、(75) の分析では、斜格経験者と与格被希求者は別々の扱いを受けているので、水海道方言に関しても妥当な分析が可能である。

非与格パターンに関しても、Takezawa の分析では、この方言に関して妥当

な記述が困難である。Takezawa によれば、標準語の希求構文で例外的格付与によって与えられる格は主格であるという。これは、標準語では、状態文の補部が主格でマークされるからである。

(79) 僕は 嫁が ほしい。

一方、水海道方言では、(80)の例文から明らかなように、hosi:や morae-de は、状態述語であるが、補部を対格でマークすることができる。

(80) a. ora sengare-nge **jome-godo** hosi:.

私－主 息子－与 嫁－対 ほしい

私は息子に嫁が欲しい。

b. ora sengare-nge **jome-godo** morae-de.

私－主 息子－与 嫁－対 もらいたい

私は息子に嫁がもらいたい。

標準語では形容詞は対格補部をとらないが、水海道方言では、主格経験者をとる形容詞の中で対象を対格でマークするものがある⁹。

もし、非与格パターンの被希求者が例外的格付与によって格を与えられるのなら、水海道方言では、対格で現れることが期待される。しかし実際には、被希求者は対格では現れない。

(81) a. **kodomo** (*-godo) meQkaQ-te morae-de.

子供－主 (*－対) 見つかってもらいたい

子供が見つかってもらいたい。

b. **are** (*-godo) sikeN-ni ugaQ-te morae-de.

彼－主 (*－対) 試験－位 受かってもらいたい

彼が試験に受かってもらいたい。

「例外的格付与の場合だけ、morae-de は対格ではなく、主格を付与する」という付加的な条件付けを行うならば、(81)の例文は説明できるかもしれない

⁹この方言で対格をとる形容詞については宮島(1959)及び佐々木(1998)参照。

い。しかし、このような条件付けだけでは、経験者格で現れる被希求者を排除することになる。非与格パターンにおける被希求者の格表示は主格しかあり得ないことになるからである。例外的格付与を用いながら経験者格被希求者を記述するためには、さらに、「斜格主語は、例外的格付与によって格形式を変えられない」といった仮定が必要になる。この仮定は、経験者格が補文の内部で付与されていることを前提としている。したがって、この仮定の導入は、補文の述部による格付与を部分的に認めることにつながる。2つの付加的な条件付けや仮定が必要になることから、例外的格付与ではこの方言の非与格パターンに関して一貫性のある分析が困難であることがわかる。

ここまでは、形式面に関して、Takezawa の分析を水海道方言に適用するのが困難であることを見てきた。次に統語論上の振る舞いについて考えたい。

Takezawa の分析では、心理述語文の斜格経験者と与格被希求者は、同一のメカニズムによって格付与される。この分析では、心理述語文の斜格経験者と与格被希求者は、統語論上も同じ位置付け（主語の位置の斜格要素）であるため、統語論上同じ振る舞いが期待される。以下に、単文の経験者格名詞句、与格被希求者、そして非与格被希求者の統語論上の振る舞いをまとめた表を示す。なお、下の表では「数量詞遊離」という用語を用いているが、これは、スペースの都合上、「遊離数量詞と同一指標を持ち得るか否か」を簡潔に表すための方便である。遊離数量詞の分布が何らかの派生によって説明されるべきか否かといった問題については、ここでは立ち入らない。「NPI」はここでも否定対極表現を表すものとする。

(82)	経験者格 名詞句(単文)	与格被希求者	非与格 被希求者
再帰代名詞の 先行詞	○	○	○
数量詞遊離	×	○	○*)
補文の否定	…	外部	内部
接辞のスコープ		(→NPI×)	(→NPI○)

*) ただし、経験者格の場合は数量詞遊離は不可能。

再帰代名詞の先行詞になり得る点で、経験者格名詞句と与格被希求者は共通

の統語論上の特性を持っている。一方、経験者格名詞句と与格被希求者は、遊離数量詞との関係では異なる振る舞いをする。経験者格名詞句は遊離数量詞と同一指標を持つことができないが、与格被希求者の場合、可能である。

Takezawa の分析では、再帰代名詞の解釈に関する 2 つの要素の共通性は、主語の位置にある要素に共通の特性として捉えることができる。しかし、2 つの要素が統語論上同じであるとする分析では、遊離数量詞との関係における 2 つの要素の違いを予測することができない。

また、否定対極表現として現れる場合の与格被希求者と非与格被希求者の違いも、Takezawa の設定した構造では分析することが困難である。否定接辞が主節の述語に付属している場合は、与格被希求者でも非与格被希求者でも、否定対極表現として現れることができた。一方、否定接辞が補文の述語に付属する場合は、非与格被希求者（主格/経験者格）は、否定対極表現であることが可能だが、与格被希求者は否定対極表現であることは許されない。本稿のように与格被希求者は主節の要素、非与格被希求者は補文の要素と位置付けるならば、この違いは、与格被希求者が補文の否定のスキープの外にあり、非与格被希求者はその中にあることにより生じたと分析することができる。Takezawa の設定した構造では、与格被希求者も非与格被希求者も補文の主語の位置にある。両者は主節の述語からの距離こそ異なるものの、補文内部での位置付けはまったく同じである。したがって、補文の否定接辞からの距離も同じことになるので、与格被希求者と非与格被希求者は否定対極表現としての現れ方も同様であることが期待される。しかしながら、実際には、両者は異なる現れ方をする。Takezawa の分析でこの事実を捉えようとするならば、与格被希求者は格を付与された後で主節に移動するといった抽象的な操作を考えなければならない。

Takezawa の分析で、この方言の希求構文を分析する上で必要になる事柄をまとめると次の表のようになる。「→」は付加的な条件付けなどによって分析が可能になる事柄を表すものとする。

このように、Takezawa (1987) の分析を水海道方言に当てはめようとした場合、いくつかの付加的な条件付けが必要になる。(83) に挙げた格フレームや否定対極表現の分布は、付加的な条件付けを加えれば水海道方言の言語事実に合わせて不可能ではない。

一方、遊離数量詞との関係における経験者格名詞句と与格被希求者の差異は、付加的な条件付けを加えても説明が困難である。Takezawa の分析では、経験

(83) Takezawa 分析 の特徴	水海道方言の分析を行う際に必要となる条件付けなど
斜格挿入	<ul style="list-style-type: none"> ・経験者格挿入（心理述語文の場合） →wagar-u の斜格主語の格表示 ・与格挿入（それ以外の場合） →非与格被希求者の格表示
例外的格付与	<ul style="list-style-type: none"> ・補文の主語が経験者格ならば、格表示を変えない →wagar-u の非与格パターンの格表示 ・それ以外の場合補文の主語には主格を付与（単独用法では補語には対格を付与するが） →被希求者に対格を付与しない
被希求者は補文 の主語	<ul style="list-style-type: none"> ・与格被希求者の場合、格付与の後で移動 →補文の否定のスコープに入らない

者格名詞句と与格被希求者は、同じ主語の位置で斜格挿入という同じメカニズムで格付与される要素である。仮に「斜格名詞句は遊離数量詞と同一指標を持ち得ない」とすれば、与格被希求者の振る舞いを説明できない。「斜格名詞句は遊離数量詞と同一指標を持ち得ない」という一般化に、「ただし、斜格挿入の前に遊離数量詞と名詞句との関係は決定される」という付加的な条件付けを行えば、斜格挿入によって格付与を行われた名詞句は、他の斜格名詞句とは異なる振る舞いをすることが期待される。この付加的な条件付けを導入すれば、与格被希求者の振る舞いは説明できるだろう。しかし、今度は、経験者格名詞句が他の斜格名詞句と同様、遊離数量詞と同一指標を持つことができないことを説明できなくなる。最後の手段としては、与格被希求者は経験者格名詞句と異なり、斜格挿入が行われた後、何らかのレベル（たとえば論理形式（LF））で無格（または直接格）にもどるという仮定の導入があるかもしれない。この「無格→斜格→無格」という派生は、いわゆる Duke-of-York Gambit (Pullum 1976) のパターンである。派生を認める立場に立っても、このようなパターンの派生は望ましいものではないだろう。

Takezawa (1987) と同様に与格被希求者が補文の内部で格付与されるといふ分析をした Harada (1977) は、与格被希求者は、他の斜格名詞句（いわゆる与格主語もその一つ）とは異なり、深層構造では斜格名詞句ではないため数量詞遊離が可能であるとした。結局、与格被希求者と斜格主語（標準語の与格

主語や水海道方言の経験者格主語)とは、統語論上異なる要素と認めなければ、2つの要素の振る舞いの違いは説明できないのである。

以上から、Takezawa の分析を水海道方言に当てはめた場合、複数の付加的な条件や仮定を新たに持ち込むことが必要なことがわかった。本稿では、与格パターンと非与格パターンに異なる統語構造を想定する分析を行ってきた。本稿の分析では、Takezawa の分析で必要になる付加的な概念が必要ない。それ故により簡潔な分析ができるといえるだろう。

この結論に対して、本稿の分析の方がTakezawa の分析よりも語彙部門で負担が大きいという批判があり得るだろう¹⁰。

本稿の分析では、複合型希求構文の一部として用いられる用法に限定した場合でも、語彙項目として *morae-de* に2つの格フレームを指定する必要がある。一方、Takezawa の分析では、少なくとも項構造のレベルでは、1つの構造を指定するだけでよい。語彙レベルでの指定に関して、2つの分析を図式化すると次のようになる。なお、便宜上述語は *morae-de* と *hoji* の両者を示す。

(84) 本稿の分析:

- a. {*morae-de*, *hosi*:} (希求者, 補文) ……………非与格パターン
- b. {*morae-de*, *hosi*:} (希求者, 被希求者, 補文) ……与格パターン

(85) Takezawa (1987) の分析を当てはめた場合:

- {*morae-de*, *hosi*:} (希求者, 補文)
- ……………与格パターン・非与格パターンとも

しかし、1つの述語が複数の格フレームを持つことは珍しくない。単独用法での *morae-de* にも、与格を含むパターンと位格を含むパターンの2つの格フレームがあった。他の現象では必要のない概念を導入して文法体系全体を複雑にすることの方が問題ではないだろうか。

水海道方言のデータに当てはまらないということが、Takezawa (1987) の分析に対する直接的な批判にはならないということは、すでに述べた。方言間の差異とはいえ、標準語と水海道方言は異なる言語体系だからである。これまでの議論は、分析の普遍性に疑問を投げかけるだけである。ただし、この方言

¹⁰この点については、宮良信詳(私信)の指摘による。

と同様の統語論上のテストが標準語でも成り立つなら、標準語の分析としても問題だということになる。

心理述語文の斜格主語（標準語では与格主語）、与格被希求者、非与格被希求者の3者が、再帰代名詞の先行詞になり得る点は、標準語でも同様である。Harada (1977) や柴谷 (1978) は、与格主語と違って与格被希求者が遊離数量詞と同一指標を持ち得ることを指摘している。また、Muraki (1978) は、非与格被希求者と異なり、与格被希求者は補文の述語に否定接辞がある場合否定対極表現として現れることができないことを指摘している。これらの先行研究を見る限り、標準語でも、斜格主語、与格被希求者、非与格被希求者の3者は水海道方言の場合と同様の統語論上の振る舞いをする事がわかる。

そうであるとするならば、Takezawa (1987) の分析は、格形式や再帰代名詞の解釈以外の側面に関して、標準語でも付加的な条件付けや仮説が必要になる。これに対し、標準語でも本稿と同様の分析を行うならば、語彙項目として複数の格フレームを指定する必要があるものの、付加的な概念を導入することなく、希求構文の形態統語論上の性質を記述することができる。

標準語では与格格助詞「に」が、意味的に非常に広い領域で用いられている。そして、それぞれの用法が部分的に統語論上の性質を共有している。たとえば、いわゆる与格主語と与格被希求者そして与格被使役者は、再帰代名詞の先行詞になり得る点で、統語論上の共通点を持っている。しかし、それらの要素を統語論上まったく同一の位置付けを与えてよいかどうかは、他の統語論上の性質を記述しなければ決定できない。Takezawa (1987) の問題点は、統語論上の特性の一部を共有する与格名詞句に対して過剰な一般化を行ったところにあると思われる。

7 まとめ

本稿では水海道方言の複合型希求構文の統語論上の特性を記述してきた。この構文には、被希求者が与格で現れるパターンと主格や経験者格で現れるパターンがある。本稿では、与格パターンの被希求者を主節の述語によって格を付与されるとともに、補文の主語をコントロールする要素として分析した。また、非与格パターンの被希求者は、補文の主語であり、補文の述語によって格表示を左右される要素と分析した。

この分析は、被希求者の格形式を記述できるだけでなく、その統語論上の特

性を記述する上でも有効である。与格被希求者と非与格被希求者は、再帰代名詞の先行詞になり得る点と遊離数量詞と同一指標を持ち得る点で、統語論上の共通性を示す。再帰代名詞と遊離数量詞に関する現象は、ともに「指示」に関する現象である。この「指示」に関する共通性は、本稿の分析では、補文の主語の特性として一般化することができる。一方、2つの被希求者には相違点もある。補文の述語に否定接辞が付属する場合、非与格被希求者は否定対極表現として現れることができるが、与格被希求者の場合、それが不可能である。これは、非与格被希求者が補文の中の要素であるのに対し、与格被希求者が補文の外側すなわち主節の要素であるためと考えることができる。すなわち、補文の内部の要素である非与格被希求者は補文の否定のスコープの中にあるため否定対極表現として現れることが可能だが、与格被希求者は、そのスコープの外側にあるため、否定対極表現として現れることができないのである。

本稿では最後に、標準語をもとに提案された本稿とは逆の格付与を想定する分析について検討した。この分析は、主語的な振り舞いをする斜格経験者、与格被使役者そして与格被希求者などを統一的に扱うために Takezawa (1987) が提案したものである。この分析では、被希求者はどの格パターンでも補文の主語の位置にあり、与格になるときは、補文の内部で「に-挿入規則」(=斜格挿入規則)により格を付与され、主格になるときは、主節の述語から例外的格付与によって格を付与される。この分析は、標準語のように与格名詞句が、統語的にも意味的にもさまざまな要素に対応する言語体系では、形式面の記述を行う限り特に問題は生じない。しかし、水海道方言のように標準語の「に」が使われている領域で複数の斜格格助詞が使い分けられている言語体系では、付加的な概念を導入することなしには、形式面の記述すら困難である。これは、心理述語の斜格経験者と希求構文の与格被希求者が、水海道方言では、経験者格と与格というまったく異なる格形式をとることから明らかである。また、この分析は、希求構文の統語論上の性質に関しては、再帰代名詞の解釈は説明できるものの、遊離数量詞との同一指標の共有や否定対極表現の分布に関しては、付加的な概念を導入することなしには間違った予測をする。

前節では、Takezawa (1987) の分析は、水海道方言の希求構文に関してだけでなく、標準語の希求構文の統語論上の現象に関しても、付加的な概念を導入する必要があることを明らかにした。

格形式の区別は、名詞句の統語論上の位置付けや意味的な特徴を反映するものである。標準語で「に」が使われている領域で、水海道方言では複数の格助

詞が使い分けられている。水海道方言における斜格格助詞（与格，位格，経験者格）の使い分けは，各要素間の統語論上の差異や意味上の差異を表しているものと考えられる。水海道方言では，斜格主語をマークする斜格（経験者格，NP-ngani）と斜格補部をマークする斜格（与格，NP-nge や位格，NP-ni）が形式上分化している。この形式上の区別が存在するため，標準語のような言語体系では見えてきにくい斜格名詞句の統語論上の差異が容易に観察できる。

水海道方言のように斜格格助詞の豊かな方言の記述は，斜格名詞句の統語論上の分類を考える上で興味深いデータをもたらす可能性がある。

【参考文献】

- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Dubinsky, Stanley. 1997. "Predicate union and the syntax of Japanese passives." *Journal of Linguistics* 33. 1-37.
- Harada, Shin-Ichi. 1977. "The derivation of unlike-subject desideratives in Japanese." *Descriptive and Applied Linguistics* 10. 131-46.
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese*. Stanford: CSLI Publications.
- McCawley, James & Katsuhiko Momoi. 1986. "The constituent structure of -te complements." *Papers in Japanese Linguistics* 11. 1-60.
- 宮島達夫. 1956. 「文法体系について」『国語学』25. 57-66.
- 宮島達夫. 1959. 「方言の語イ体系－茨城方言の形容詞を例として－」『国語学』36. 15-32.
- Muraki, Masatake. 1978. "The *sika nai* construction and predicate restructuring." In John Hinds & Irwin Howard eds. *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. 155-77. Kaitakusha.
- Nakau, Minoru. 1973. *Sentential Complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- Pullum, Geoffrey. 1976. "The Duke of York gambit." *Journal of Linguistics* 12. 83-102.
- 真田信治. 1980. 「語法上の“ゆれ”の地理的背景」『言語生活』342. 42-47.
- 佐々木冠. 1998. 「水海道方言の対格－有生対格と無生対格の統語論－」『日本語科学』4. 99-121.
- 佐々木冠. 1999a. 「水海道方言における格の範疇」博士論文，筑波大学.
- 佐々木冠. 1999b. 「希求構文の統語論－水海道方言の場合－」『日本方言研究会第68回研究発表会発表原稿集』. 35-42.
- Sasaki, Kan. 近刊予定. "Some considerations on the optative construction in the Mitsukaido dialect." In Ritsuo Kikusawa & Kan Sasaki eds. *Modern Approaches to Transitivity*. Kuroshio Publishers.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』. 大修館書店.

- Silverstein, Michael. 1976. "Hierarchy of features and ergativity." In Robert Dixon ed. *Grammatical Categories in Australian Languages*. 112-71. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Takezawa, Koichi. 1987. *A Configurational Approach to Case Marking in Japanese*. Doctoral dissertation. University of Washington, Seattle.
- 竹沢幸一 & John Whitman. 1998. 『格と語順と統語構造』研究社出版.

【付記】

本稿では、例外的格付与による非与格パターンの格付与を批判した。これについては、竹沢幸一先生より次のような指摘があった。本稿の批判は、水海道方言の-godo が対格のマーカーである限りにおいてのみ有効であり、例えば-godo が有生性の agreement marker といった他の文法範疇を表す要素であるならば、本稿で行った批判は成立しない、というものである。

他の文法範疇を表す機能を-godo が持っていたとしても、そのこと自体は、-godo が対格を表す機能を持っていないことを意味しない。1つの形態素が複数の文法範疇を表すことは決して珍しくない。水海道方言でも、例えば-nge は与格であることと同時にそれが付属する名詞が有生であることを表す。この場合、1つの形態素が、格と有生性という2つの文法範疇を表しているわけである。

問題は、-godo が有生性を表すマーカー¹¹であるか否かではない。それが対格を表す機能を持っているかどうかである。

本稿では、-godo を有生の対格格助詞として扱ってきた。言い換えるとこの形態素は、有生性を表す機能と同時に格を表す機能を持っているというわけである。

以下、なぜ-godo を対格のマーカーと見なすかについて述べる。まずはじめに、格の分類基準を述べ、次に対格の認定基準について述べる。-godo の対格マーカーとしての位置づけは、この2つの基準から自ずと導かれるであろう。さらに問題となる形容詞文における NP-godo の対格としての位置づけについて述べる。

格の分類には、2つの見方がある。形式格 (formal case) と分布格 (distributive case) である (Comrie 1991 参照)。形式格とは、格形式のみに基づく格

¹¹それを agreement marker と呼ぶかどうかは別として。

の分類方法であり、名詞の全てのクラスで同一の対立があるとは限らない。分布格とは、当該言語の名詞のあるクラスで確立された格の分類が全ての名詞のクラスに当てはまるとするものである。例えば、ラテン語の与格と属格を見てみよう。第1変化名詞と第2変化名詞では格の対立が異なる。

(A1)	第1変化名詞 poēta(詩人)	第2変化名詞 dominus(主人)
「与える」の受け手(単数)	poētae	dominō
所有者(連体修飾)(単数)	poētae	dominī

形式格の観点では、第2変化名詞(dominus)には与格と属格の対立があるが第1変化名詞(poēta)にはその対立がないことになる。この観点では、「与える」の受け手と連体修飾構造の中の所有者は同じ名称の格で呼ばれることになる。それが、与格と呼ばれるか、属格と呼ばれるか、あるいは両者とは別の名称で呼ばれるかは別な問題として。一方、分布格の観点からは、第2変化名詞で確立している与格と属格の対立は、第1変化名詞にも当てはめられることになる。この観点からは、「与える」の受け手の poētae は、与格と見なされ、連体修飾構造の中の所有者としての poētae は属格と見なされる。分布格の観点は、形態論のモデルとしては、Word-and-Paradigm のそれである。分布格と形式格では異なる分類が行われることがあるが、両者は形式的な対立に基づいて格の分類を行っている点では共通している。これは、格というものが形態論上の概念である以上当然のことである。両者の違いは、分類を名詞全体を視野に入れて行うか、あるクラスの中で完結させるかの違いである。

では、格形式の対立がある場合、それぞれの格形式をどのような名称で呼ぶべきなのだろうか。これは、言い換えると、ある格形式に「主格」や「対格」や「能格」や「与格」というラベルを貼る基準は何かということである。格形式の名称は、その格形式の代表的な用法の統語論上の機能や意味役割に基づいて決められるのが一般的である。ここでは、本稿に関与的な対格の認定基準について述べる。

主格、対格、絶対格、能格という文の核となる中心的な要素を表す格は、他動詞文の主語と目的語、そして自動詞文の主語の形式上の対立から名称を与えられるのが一般的である。ここでは Dixon (1979) にしたがって、他動詞文の主語を A、目的語を O、自動詞文の主語を S で表すことにしよう。対格と能格

は、ともにこの3つの要素の中で仲間外れになっている要素を指す名称である。ある言語において形式上 $A = S$ であり O だけが別の格形式で表される場合、 O を表すマーカーは対格マーカーと見なされる。この場合、 A と S を表す格形式は主格と呼ばれる。これに対し、形式上 $O = S$ であり A だけが別の格形式で表される場合、 A を表すマーカーは能格マーカーと見なされる。そして、この場合 S と O を表す格形式は絶対格と呼ばれる。¹²

(A 2)	$\alpha = \text{主格} / \beta = \text{対格}:$	α	α	β
	$\alpha \neq \beta, \gamma \neq \delta$	A	S	O
	$\gamma = \text{能格} / \delta = \text{絶対格}:$	γ	δ	δ

水海道方言の *-godo* は他動詞文の目的語 (O) をマークする形態素である。この形態素は他動詞文や自動詞文の主語 (A , S) に付属することはない。この方言では、 A と S は格に関してはゼロマーキングであり、共通している。

(A 3) 水海道方言の文法格

	A	S	O
有生名詞	$-\phi$	$-\phi$	<i>-godo</i>
無生名詞	$-\phi$	$-\phi$	$-\phi$

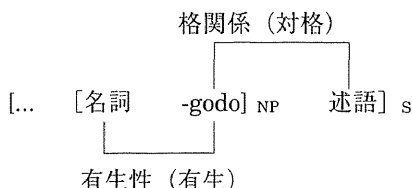
この形式上の対立から、*-godo* は、対格と認定することができる。これは形式格の観点に立っても分布格の観点に立っても同様である。むしろ問題なのは、無生の O を表すゼロマーキングの名詞句の方である。これについては、本稿では分布格の観点から無生の対格として位置付けてきた。この位置づけについての議論は、佐々木 (1998) を参照。

水海道方言の *-godo* は、有生名詞のみに付属する形態素である。このことは決して、*-godo* が対格であることを否定するものではない。ある形態素が格を表す機能と付属する名詞の有生性を表す機能を持つことは決して矛盾しないからである。格という名詞句と述語の関係を表す概念と有生性という付属する名詞の意味的な素性は別次元の問題だからである。*-godo* は述語との関係に

¹²ただし、記述言語学の伝統によっては、絶対格という名称ではなく主格という名称が用いられる場合もある。

においては対格という格関係を表し、付属する名詞との関係では有生性を表すという二重の機能をもった形態素と見なすことができる。

(A 4) -godo の二重の機能:



以上、-godo が対格を表す機能を持っている格助詞であることを見てきた。他動詞文の目的語に付属した-godo を対格と認定することについては、これで問題ないであろう。

次に直接目的語以外の要素に付属する-godo を対格のマーカーと認めるかどうかについて考えたい。

対格名詞句が直接目的語以外の要素であることは、決して珍しいことではない。Kurylowicz (1949) が対格の副詞的用法と見なしたラテン語の行き先を表す対格などがそれである。

対格という格は、直接目的語という文法関係を基準にして認定される。しかし、この基準から対格として認定された格形式の名詞句が、直接目的語以外の機能を担っている要素として現れたからといって、対格であることが否定されることはほとんどない。前述の Kurylowicz のいうところの副詞的用法がそれに当たる。アイスランド語やケチュア語インバブラ方言では対格名詞句が主語的に振る舞うことがある。このような対格は対格主語 (accusative subject) と呼ばれるが、直接目的語として機能しないからといって対格であることを否定されることはない。これは、格というものが基本的に形態論上の単位だからである。

対格という格を認定するためには、目的語という文法関係を利用せざるを得ない。しかし、一旦ある格形式を対格と認定したあとは、その格形式が常にどの構文でも直接目的語と対応しなければならないというわけではないのである。他動詞文の文法関係をもとに対格と認定した格形式が、他の構文の目的語以外の要素を表しても、それは格という形態論上の分類では対格なのである。

本文の中でも述べたが、水海道方言では、心理形容詞文の一部で補語が NP

-godo の形をとる。この場合の NP-godo は、直接目的語と言えるかどうか疑問である。このような名詞句には、他動詞文の直接目的語と共通する統語論上の振る舞いがほとんど認められないからである。しかし、そのことをもって、この場合の -godo が対格マーカーではないとは言えないのである。-godo は、すでに他動詞文をもとに対格格助詞であることが確立しているからである。

述語全体としては形容詞である *morae-de* (もらいたい) は、対象を NP-godo で表す。この場合の NP-godo は直接目的語として機能していない可能性もある。しかし、対格であることには変わりがないのである。そして、*morae-de* が補語に対格を付与する能力がある以上、例外的格付与の場合に限って対格ではなく主格を付与することについては、何らかの説明が必要となる。そして、その説明のために付加的な条件付けが必要になってくる。

【付記の参考文献（本文に含まれないもののみ）】

- Comrie, Bernard. 1991. "Form and function in identifying cases." In Frank Plank ed. *Paradigm: The Economy of Inflection*. 41-55. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dixon, Robert. 1979. "Ergativity." *Language* 55. 59-138.
- Kurylowicz, Jerzy. 1949. "Le problème du classement des cas." *Biuletyn PTJ* 9. 20-43. (reprinted in *Esquisses linguistiques*. 131-50. Wrocław-Krakow: Ossolineum. 1960.)